The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本人の生活文化を学ぶ ： 「明治・大正期の日本人の生活文化史」授業における取り組み
Author(s)	劉, 玲芳
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2020, 18, p. 21-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代日本人の生活文化を学ぶ
―「明治・大正期の日本人の生活文化史」授業における取り組み―

Learning from Japanese Cultural and Historical Study of Life of Modern Japan:
Efforts of “Japanese Cultural and Historical Study of Life of Meiji and Taisho period” class

劉　玲芳

【要旨】

日本語専攻の大学３、４年の留学生に近代の日本文化を教える時に、若者が高い関心を持っているポップカルチャーの授業と完全に異なる少し昔の日本文化について、どのようにしてやや専門的な知識を教授すると同時に、留学生が分かりやすく受講できる面白い授業にするかは、筆者にとって一番難しいところである。

本稿では、大阪大学日本語日本文化教育センター（CJLC）の「日本近現代文化学研究基礎」（2019年度の春～夏学期）の科目として、「明治・大正期の日本人の生活文化史」という授業を行うなかでの取り組みと工夫、そしてこの授業の成果や留学生の反応などについて述べる。

具体的には、この授業では、自主学習を促すために、反転授業の要素を取り入れたり、プレゼンテーション能力を養成したりするために口頭発表会を実施した。また、筆者が常に意識して授業の改善に活用していたコメント用紙の結果、および成績評価に用いた多様な方法、そして、この授業から得られたと考えられる教育効果についてまとめる。

１．はじめに

周知の通り、留学生向けのテキストといえば、日本語についてのテキストがほとんどで、現況では留学生向けに日本文化を教えるにあたり、日本文化を専門とする教員にとって参考になりそうな教材はあまり存在していない。一方、一言で「日本文化」といっても、それはどんなものであろうか。留学生が理解している日本文化と教員側が教えたい日本文化は必ずしも一致しているとは言えないと思われる。筆者自身の留学経験から考えても、これまでの現代日本の基盤を形成させた近代日本において、どのような変化があり、現代の日本人の生活にどのような影響を与えたのかについて、ずっと知りたかった。しかし、残念ながら、筆者は自分の留学中にそうした生活文化史を扱う授業に出会わなかった。それをきっかけに、一般の日本人の身近な文化、生活習慣などに注目して留学生に日本の歴史を教えると、日本文化をよりわかりやすく理解できるのではないかと考え、授業を設計することにした。

２．授業内容について

①受講対象者

この授業は、Jプログラム・Mプログラムの留学生が受講できる。この授業では、明治・大正時代の日本人の衣食住から学校の教育、新風俗までさまざまなテーマに触れながら、学生に近代日本人の生活文化について学んでもらう。

②本授業の目標

この授業の目標は、以下の通りである。

（1）明治・大正時代の日本人の生活文化に起きた変化、およびその背景を理解できるようになる
（2）日本人の近代の生活文化から一つのテーマを選んでもらい、それを自国の近代の生活文化と比較できるようになる

これらの目標から分かるように、現在の日本人の日常生活のルーツや変遷過程を探ることによって、受講生に日本の近代文化の発端や多様性について理解してもらうことが本授業の狙いである。

③授業の構成

春～夏学期に行っている「日本近現代文化学研究基礎」全15回の講義内容は下記のとおりである。

第1回　導入
第2回　近代のはじまり
第3回　服装
第4回　食生活
第5回　暮らし
第6回　交通・通信
第7回　中間小レポート
第8回　復習・相互評価
第9回　学校教育
第10回　新風俗
第11回　仕事
第12回　旅行
第13回　日本人の娯楽（反転授業）
第14回　まとめ＆発表準備
第15回　最終発表会

④授業の概要

第2回では、まずは歴史の流れおよび歴史上の大事件などを整理し、明治・大正時代の簡単な基礎知識を学生に教えた。第3回以降、明治維新後の日本人の日常生活に関わる文化について順次扱った。具体的には、前半の第3回から第6回までの授業で、服装、食生活、暮らしまた交通・通信といった四つの方面から、明治・大正期の日本人の身近な文化は一体にどのように変化していったのかについて説明した。

さらに、後半の第9回から第13回までは、明治・大正時代に現れた新しい文化について講義を行なった。たとえば、第9回の中では、寺子屋、藩校などを中心とした江戸時代までの教育機関は明治時代になると、全国統一的な学校教育に変わっていったが、その詳しい過程について講義した。また、第11課では、明治・大正時代に現れた、たとえば、新聞記者、写真師、洋

服屋、鉄道員などといった様々な新しい職業について紹介した。また、女性が徐々に社会に進出しはじめたこと、たとえば、女学生、看護婦、女教師などの職業婦人が誕生したことについても扱った。他に、第12課では、明治・大正期の旅行手段、観光地、観光プランなどの旅行文化についての講義を行った。

３．授業を行う上での工夫

今回、この授業の受講者はアメリカ人が２人、ハンガリー人が１人、ミャンマー人が２人、男性３名と女性２名の合計５名であった。受講生たちはいずれも日本語学科の学生である。日本語のレベルは、聞く、話す能力は高く、授業中のコミュニケーションはほぼ問題なかった。ただ、歴史的な専門用語および人名、地名などの難しそうな語彙が出てきた際には、筆者が黒板に日本語のルビを振りながら説明した時もあった。

３．１　授業内容の工夫

＜画像、ビデオ＞

この授業の受講生の出身地はアメリカ、ヨーロッパ、東南アジアで、文化背景がかなり異なっていた。日本に来る前に、受講生たちが持っている日本文化のイメージはそれぞれ違うと、１回目の学生たちの自己紹介からわかった。たとえば、江戸時代の日本人男性の髪型である「ちょんまげ」について話す時に、日本人学生であれば、教員の説明がなくても直ちにイメージがつく人が多いと思うが、本授業では、まったく知らない学生のほうが多かった。したがって、日本人の生活文化の講義をする際に、留学生にあまり馴染みのないものを理解してもらうために、いかに効果的に説明するかはとても難しいところであった。そこで授業では、画像を多用し、視覚的に示していくよう心がけた。たとえば、「ちょんまげ」が出てきた際、実際にちょんまげ頭の男性の画像を示すと、学生から時代劇の話が出てきたり、彼らがかつて見たドラマの中の人物のイメージがすぐに思い出されたりした。こうして、筆者が話している授業の内容を、これまでに見聞きした経験と結びつけながらわかりやすく理解でき、面白く受講したようだ。

また、ビデオを活用することによって、短い時間内で留学生の関心を集め、授業内容に集中させる効果があったように思われたのは、第６回目の授業のことだった。この授業は「交通・通信」の講義だったが、日本の鉄道や列車の歴史、そして、鉄道の発展の知識について学ぶ必要があった。現在ではなかなか見ることができない、だいぶ昔の列車の種類を紹介するにあたり、やや長い時間をかけて文献資料ばかりを読ませてしまったため、学生たちは集中力を持続できなかった。筆者はその雰囲気を感じ取り、事前に用意していた明治時代の列車の関連ビデオ資料を見せた。学生たちにとっては文字資料を読むより、ビデオを鑑賞するほうがずっと新鮮なようで、すぐにビデオの内容に集中するようになった。受講生のこのような変化に気づいた筆者は、ビデオをより効果的に使用するために、途中で止めて、列車関連の難しいところを説明し、授業を展開した。当日の授業終了後、学生に記入してもらったコメント用紙には、「ビデオを見ることで非常に面白かった」や、「日本語はそれほど聞き取れなかったが、先生の説明のおかげで、わかりやすくなった」などの意見があった。ビデオを利用することは、学生の集中力を改善する効果があり、講義内容の面白さを増幅させる結果となったと言える。

３．２　自主学習を促す工夫

＜反転授業要素の取り入れ＞

本授業は基本的に、教員がパソコンやディスプレイなどの機械を利用し、学生に授業を行うという講義形の授業形態をとっている。毎回、異なるテーマについて授業を実施しているが、授業の基本的な流れに慣れると、受講生たちが集中力を持続することができなくなった。それに、受講生はもっぱら教員が準備した講義内容に頼りメモを取ったりするが、あまり自分で思考しないという傾向があった。こうした状況を改善し、受講生が能動的に学べる方法がないだろうかと考え、「反転授業」の要素を取り入れた授業を実施することにした。

反転授業は、アメリカで始まった試みで、日本の教育界でも注目されている教育技法である。具体的に言えば、学生に教材や資料を事前に配り、それを自宅で学習してもらってから、授業中に学生が予習で得た知識を応用して問題を解いたり、実習したりする教育法である。本授業では、一回に限って、教員と学生の立場を逆転させ、学生に授業外の時間、たとえば図書館や自宅などで教員が事前に配布した資料について自主学習をしてもらう。そして、教員や他の学生に報告するために、授業内で決めたテーマについて学生にプレゼンテーションをしてもらった。

具体的には、明治・大正時代の日本人の生活文化に関して、12回目の授業が終わる前に、15分の説明時間を設けて、「日本人の娯楽」という大きなテーマのもとに、５名の受講生に一人ずつ「映画」「スポーツ」「写真」「広告・ポスター」「海水浴」の五つのミニテーマを選んでもらった。そして、５人にそれぞれが担当するテーマの関係資料を配り、授業外の時間で予習しておくよう指示を出し、プレゼンテーションの準備をしてもらった。13回目の授業が始まると、まず、５人の受講生にプレゼンの順番を自由に決めてもらった。その後、一人に10分程度の時間を与え、受講生自身で学習し準備してきたものについて報告してもらった。一人のプレゼンが終わった後、他の受講生や教員から発表者に質問をした。これは、受講生同士にコミュニケーションの機会を与えるとともに、発表者の学習の効果について筆者が確認するという意図があった。ただ、発表者が答えられなさそうな質問があった場合や答えが不十分であった場合、筆者はその場で発表者をサポートしたり、発表者の発表に補足したりした。結果として、受講生全員がよく準備して、ある程度自分が理解した内容をまとまった形で説明することができた。その中には、今回の反転授業の準備過程で配布した資料以外に、もっと多くのより広い深い知識を求める受講生さえ現れた。また、受講生たちに反転授業を体験してもらったことによって、学生の学習効率があがり、授業時間内でプレゼン能力や問題解決能力を身につけることができたと思われる。したがって、授業全体の中で、たとえ１回だけだとしても反転授業要素を取り入れてみると、学生の自主学習を促し、学習意欲を高める効果があり、教員の予想を上回るよい教育効果が得られると考えている。

３．３　授業改善の方法

筆者は常に授業について反省し、改善を心がけた。全15回の内、合計９回でコメント用紙を配布し、受講生のコメントや意見を積極的に集めた。

「コメント・意見」（資料１）用紙の内容は、主に二つの質問から成り立っている。一つ目が「Ｑ１　今日の授業の内容について、面白かったところは？」であり、二つ目が「Ｑ２　今日の授業に対する感想は？」である。

「Ｑ１」を設定した理由は、教員が準備した授業内容のなかで、受講生が最も興味を引いたところを把握するためである。毎回、異なるテーマの中で、受講生が一番関心をもった部分と教員が予想して用意した面白い部分が一致するかどうかを確認できる。この後、新しい授業内容を準備する段階で、学生に教えたい知識をいかに面白くするかを考える際に、受講生がコメント用紙に書いた意見は非常に役に立っている。

では、実際に「Ｑ１」を用いて、どのような教育効果が得られたのかを説明しておこう。まず、授業内で事前に準備していた内容を超えた授業展開に面白く感じた学生がいた。たとえば、９回目の「学校教育」というテーマで、明治時代の学校教育制度の変遷について講義をする際に、留学生たちに彼らの母国の教育体制について質問をした。受講生に理解を促すために、筆者は黒板に学生から聴取したアメリカ、ハンガリー、ミャンマーのそれぞれの学校教育制度のポイントを書き込んで、日本と比較してみた。ミャンマーには義務教育制度がなく、アメリカでは義務教育の年数が州によって違うなど、さまざまな差異があることが比較することによってわかった。９回目の授業終了後、５人の中３人が各国の教育体制の違いについて面白く感じたという感想をコメント用紙に書いていた。コメント用紙を通じて、留学生たちが日本文化を学ぶ際に、何らかの形で自国の文化と比較したり、相違点と類似点を見つけたりすることに大きな興味を持っていることを、実感することができた。そこで、９回目以降の授業のなかで、時間が許す限り授業のテーマに関連する、少なくとも一つくらいの「日本と母国」の比較ができそうな質問を用意し、受講者たちにディスカッションする機会を設けるようにした。

また、「Ｑ２ 今日の授業に対する感想は？」に関して、これを設定した理由は二つある。一つ目は、受講生が授業中に時間のため聞けなかった、あるいは聞きにくい質問がある場合、コメント用紙に記入することによって、次回の授業の中で教員が回答できることである。二つ目は、受講生が授業の全体について、教員に改善してほしい意見があった場合、直接教員に話さなくても伝えることができる。

「Ｑ２」で寄せられた受講生の様々な質問を通じて、留学生である彼らの考え方を理解することができ、彼らの関心点を把握できた。また、コメント用紙を用いて受講生の疑問を受け付けると、万が一、教員を少し困らせる質問があった場合に、学生に納得できる答えをするために、授業後に考えたり、調べたりする時間が必要なため、コメント用紙は非常に役立つものであった。たとえば、６回目の「交通・通信」の講義の際に、日本の郵便配達制度としては、江戸時代に飛脚がすでに存在したことについて説明したのだが、その後、「飛脚が高価な物を配達する場合、物を盗んで逃げたことはありますか」という質問がコメント用紙に寄せられた。このような質問が来るとは考えてもいなかった。もし、授業中に学生にそのような質問を挙げられたら、筆者はどう答えていいのか、すこし困っていただろう。だが、幸いにも、コメント用紙に書かれたものなので、授業後に資料を調べたり、他の教員と議論することができたりしたので、次の授業の時にその学生に納得できる回答を返すことができた。

また、「Ｑ２」の設問により、授業に対する学生の反応がわかる。例を挙げると、授業の内容理解の助けのために、本授業では短いビデオ資料をよく利用して学生に見せている。ところが、ほとんどのビデオには字幕がついていないため、時に途中でビデオを停止し、難しい日本語を説明したり、ビデオの話をまとめたりしながら見せている。だが、こうした行動は、受講生がビデオを鑑賞する際に邪魔になる可能性があるのではないかと不安を感じていた。しかしなが

ら、コメント用紙の回答から、この不安な気持ちを解消することができた。字幕のない日本語の音声を聞き取れなかった留学生から、「先生が説明してくださってよかったです」というコメントをもらった。また、教員のそうした行動は気にならず、毎回のビデオを楽しめたというコメントもいくつかもらった。

「Ｑ２」の設問のなかで、筆者にとって最も嬉しいコメントがあった。それは、本授業を通じて、学習意欲が上がったというコメントである。５回目の授業、明治・大正時代の日本人の暮らしに関する講義のなかで、ちゃぶ台（丸いテーブル）で家族がそろって食事をするという明治時代の新しい生活習慣を取り上げた。受講者の中に、ちゃぶ台に関心を持っているミャンマーの学生がいた。彼は、「ちゃぶ台はミャンマーでも使われていたが、いつから使い始めたのかわからない。ミャンマーのちゃぶ台の歴史を調べてみたい」と自ら授業外でもっと学びを深めたいという意欲を示していた。

「Ｑ２」の設問は受講者の本音を知るには非常に有効な手段だと実感している。よいコメントをしてくれた場合、授業中の行動や教育方法に教員が抱えている不安を解消することができるし、受講者からの指摘があった場合、授業の改善にとって非常によい機会となる。たとえば、11回目の明治・大正人の「仕事」に関する講義が終了した後、「今日の授業も面白かったですが、『三等片道の運賃は30銭』と話した際に、今のお金にたとえると、わかりやすくなると思う」というコメントをもらった。確かに、受講生に指摘されたように、筆者は授業の準備段階で、授業中に特に教えたいところ、大事なところについてできる限りわかりやすく説明しようとしていたが、細かいところ、あるいは飛ばしてもいいところへの配慮が足りなかったと改めて反省した。それ以降、授業を準備する際に、細かいところでも、事前に受講生の立場から考えながら、説明する必要がある知識や材料を用意したり、授業中に学生にわからないことがあるかを聞いたりしている。

４．成績評価および教育効果

本授業の受講生の成績を評価する際に、学生の努力を促しながら、出来るだけ様々な方面から学生に納得できるような成績をつけようとした。従来、学生の成績を評価する手段として、出席率や授業への参加度、中間レポート、最終試験あるいはレポートの提出などの方法がよく使われている。確かに、留学生たちにとっても上記のような評価の方法にはあまり違和感がなく、教員側も評価しやすいと思う。ところが、教員からよい点数をつけてもらうために、試験やレポートなどの特別な日を目指し集中して学習し、他の期間はそれほど努力しなくてもいいと思う学生は少なくなかった。そこで、この授業では、受講生が能動的に学びを修めるために、いくつかの目標を立てて、ゲームの感覚でそれを受講生に達成させるように工夫した。具体的に言えば、多めにコメント用紙を利用して、教育効果を常に把握する以外に、中間のゴールとしてレポートを一回実施し、最終のゴールとして口頭発表会を行った。そこで、成績評価は、平常点（出席率・授業参加度、20％）以外に、中間レポート（30％）や中間レポートへの相互評価（10％）、最終プレゼンテーション（40％）といった多様な評価方法を設けた。

４．１　中間レポートおよび中間レポートへの相互評価

まず、中間レポートの実施について述べる。中間レポートは５、６回目の頃に何度も注意を

喚起し、受講生に知らせ、７回目に実施した。事前にも知らせたように、レポートを書く途中で、受講生自身が用意したメモやこの授業の配布資料を参考にしたり、電子辞書を調べたりすることは可能であるが、原則として、携帯やタブレットなどによるネットでの検索は禁じている。また、レポートは７回目の授業中に提出することが前提となり、授業外の提出を認めないことにしている。レポートの題目として二つのテーマを設定し、500字程度で記入してもらった。では、次に、中間レポート（資料２）の課題について説明する。

テーマ１は「近代（明治・大正時代）日本人の衣食住の文化のなかで、あなたにとって一番深く印象に残ったものは何ですか？その文化について少し紹介してください。そして、深い印象が残った理由について簡潔に述べてください」という設問である。この設問は主に、学生がこれまでの授業内容に関してどれほど理解し、どの部分の知識を身につけているのかを確認する意図がある。また、学んだ知識をまとめる能力を身につけてほしいという狙いもあった。

テーマ２は「あなたの国では、近代の衣食住の文化はどのように変化してきましたか？「衣」「食」「住/暮らし」の三つのテーマから、一つを選んで詳しく述べてください」という設問だった。この設問を行った理由は、授業中に受講生たちはこのような身近な生活文化に非常に高い関心を示したものの、時間の制限があり、彼らの母国の状況について話す余裕がなかったからである。また、日本における近代の衣食住の文化を学習したことをきっかけに、留学生たちの母国における衣食住文化の変化や変遷過程に注目してもらい、日本と比較することによって、異なる文化の間の類似点や相違点について考えてほしかったのである。

中間レポートを学生の成績評価の一環として実施した後に、中間レポートについての相互評価も活用した。受講生が中間レポートを提出した後、それを採点し、受講生の学習度や内容を把握した。次に、８回目の授業で、これまで講義をしていた５回の授業内容（「近代のはじまり」「服装」「食生活」「暮らし」「交通・通信」）について受講生と一緒に確認し、復習した。その後、その前回に実施した中間レポートを受講生に相互評価してもらった。具体的な実施方法は、まず、５人を二つのグループに分け、彼らが回答した中間レポート用紙のコピーを本人に配った。そして、２人のグループと３人のグループのなかで自分の中間レポートを交換するよう指示した。同時に、「中間レポート採点に関わるルーブリック」の用紙を全員に配布した。

さて、中間レポートの実施や中間レポートへの相互評価によって、どのような教育効果を得られたのだろうか。

中間レポートに書かれた受講生たちの解答を回収してまとめると、「食物」が一位、「服装」が二位という順で、本授業に対する印象が一番強かったようである。受講生の解答によれば、その中でも、明治・大正時代の日本人の食生活に関して、新しく日本に流入した「ワイン」が血の色を連想させるため、外国人が日本人を吸血人間にしようとしてぶどう酒を作ったという噂の話が受講生にかなり面白く受け入れられたようだった。また、明治初期にカタカナで表記した新しい洋食の名前は彼らの中で印象に残っていたようである。確かに、上述した部分について講義をした際に、受講生たちは授業内容に高い関心を示していたし、ほぼ全員から大きな笑い声が起きていたことはまだ記憶に残っている。また、本授業を通じて、現在の我々の身近な日本文化を連想させる効果があることがわかった。たとえば、レポートに書かれている学生の文章を読んだところ、「以前は外国の食べ物だが、現在は日本食と言える食べ物が多くある。たとえば、とんかつとコロッケとカレー。今の日本のどこでも食べられるし、有名な食べ物で

ある」と書いた学生がいた。「食物」にしろ、「服装」にしろ、いずれも我々の身近な生活に密接している文化である。この授業で100年前の日本人の食生活や衣生活を学習させることは、留学生たちに現在の日本文化について考えるきっかけを作り、日本文化への関心や理解を高める効果が見出されたといえよう。

一方、二つのグループに配布した「中間レポート採点に関わるルーブリック」により、学生同士の相互評価を行ってもらった。この「ルーブリック」では、評価基準を「優良」（５点）「普通」（３点）「不可」（１点）の三段階に分け、「課題への理解」「授業への理解」「資料の引用、出典」「全体のバランス」「字と文化」という五つの方面から受講生の仲間同士でレポートを評価してもらった。そして最後に、合計の点数をつけてもらった。相互評価の結果を見てみると、受講者は仲間に対する評価はある程度の客観性を持ち、ルーブリックに書かれた評価基準に基づいて公平に評価していると思われた。最終の点数の順位を考えると、受講生の相互評価と筆者の評価はほぼ一致している。真面目に解答し読みやすい文章を書いた受講生は仲間から良い評価をもらったのに対し、設問をあまり理解せずただ自由に自分の意見を述べたり、読みにくい文章で回答したりしている受講生は良くない点数しかもらえなかった。相互評価を行う前は、受講生同士で評価しあえるのか疑問ではあったが、結果としては問題なく行えた上に、筆者からの評価と結果はそれほど変わらなかった。要するに、受講生の相互評価の結果は客観性を持つ結果ではないかと考える。つまり、学習者同士による相互評価は、時に教員の評価の参考にもなる可能性が示された。その他には、受講者間の相互評価は、受講生自身が書いたものへの自己反省の機会にもなるとも言えるだろう。

４．２　プレゼンテーション

最後に、最終回のプレゼンテーションの実施およびその教育効果についてまとめてみる。

この授業のイントロダクションで説明したように、受講生に事前に用意したテーマの範囲や詳細を知らせ、14回目の授業の時間を与え、授業中にプレゼンテーションの準備をしてもらった。発表時間は一人に15分程度を与え、その後５分の質疑応答の時間を設けた。他の受講生や教員からの質問に答えられない場合には、適宜筆者がサポートをしたり、発表者の発表に補足したりした。

発表のテーマは二つの選択肢を用意した。一つ目は、「①日本人の生活文化から一つのテーマを選び、それを自国の近代の生活文化と比較してみてください。たとえば、近代における日本と中国の服装の変化について」であった。二つ目は、「②授業のテーマ以外に、自国の近代の生活文化から一つのテーマを選んで、それはどのように変化してきたのかを紹介してください。たとえば、中国におけるラジオの誕生と発展」であった。

授業最終回の当日、プレゼンテーションの順番をまず受講生に自由に決めてもらった。発表の結果から言うと、ほとんどの受講生が①の日本と自国の比較を選んだ。このような結果になった理由について、二つの可能性が考えられる。一つ目は、そもそも、①が比較文化で、受講生が最も関心を持っているテーマであるということである。二つ目は、①のテーマの比較の対象は絞ってあるので、わりとまとめやすく発表しやすいことであろう。それに反して、②の自国の近代の生活文化について発表すると、全く新しい資料を調査し、発表の仕方までも考えないといけないなど、時間がかかるので、受講生に選ばれなかったと考えられる。このような

結果を踏まえて、今後、発表準備の時間や発表内容の難易度を考え、受講生に多様なプレゼンテーションをしてもらえるように設問を考えないといけないと筆者は改めて認識した。

テーマの選択に偏りが現れたものの、①を選んだ受講生たちは精一杯のよい発表をしてくれたことは特筆すべきであろう。たとえば、「日本とアメリカのゲームの比較」や「日本とミャンマーの服装の比較」など、非常に面白いテーマについて発表した受講生がいた。また、②のテーマを選んだ唯一の受講生は近代の「ミャンマーの食生活の変遷」について素晴らしい発表をしてくれた。受講生全員は様々な資料を調べたり、発表の材料を準備したりして大変だったと思うが、最終の発表内容や発表した際の説明の仕方、そして他の学生の質問への回答などから成績を評価すると、意外な結果となった。それは、今回最も評価の高かったプレゼンテーションをした学生は中間レポートではいい成績がとれなかった学生で、反対に中間レポートでいい成績をつけた学生は最後のプレゼンテーションでは評価が最も低い結果となったことであった。このように、それぞれの、得手不得手があり、何か一つの方法だけで成績をつけるのではなく、評価に客観性を高めるために、多様な方面から評価する必要があると深く実感した。

5．おわりに

本稿では、「明治・大正期の日本人の生活文化史」の授業における取り組みについて述べてきた。この授業は5人で少人数だったため、反転授業、相互評価、最終プレゼンテーションなど、様々なアクティブ・ラーニングの教育技法や成績評価の方法を生かすことができた。そのため、学生からも満足度が高い評価が得られた。そして、授業効果調査の結果の中の、「授業についてなど何か意見があれば書いてください」という項目の下では、下記のような受講生からのコメントが寄せられた。

・日本人の生活について色々なことが勉強になりました。
・れきしにあまりきょうみのない私にとってもかなりおもしろいじゅぎょうでした。

また、今後、成績評価について、できる限り多様な方面からある程度の客観性をもつ方法で受講生の成績を評価する必要性があると実感することができた。文章を上手に書ける学生もいれば、プレゼンテーションを上手にできる学生もいる。どちらか一つだけ選んだ場合、学生の成績を評価する際には、学生の他のいいところを見逃す可能性があり、それでは学生に自信をつけることができなくなる恐れがあるため、多方面からの評価は非常に重要だということが分かった。

一方、本授業を実施した中で、改善する余地がある部分があった。たとえば、反転授業要素を取り入れた授業を実施した際に、学生に配布した資料にはやや難しい文章があったため、一部の学生から読むのに時間がかかり大変だったという意見があった。今後、学生の学力や日本語レベルを十分に考慮した上で、可能な限り読みやすい資料を選ぶ必要があると考えている。

参考文献

1．主体的学び研究所編『特集反転授業がすべてを解決するのか』主体的学び研究所、2014年。
2．成田秀夫『アクティブラーニングをどう始めるか』東京：東信堂、2016年

3．反転授業研究会編・芝池宗克・中西洋介著『反転授業が変える教育の未来：生徒の主体性を引き出す授業への取り組み』明石書店、2014年。

（りゅう　れいほう　本センター特任助教）

【資料1】アンケート用紙

アンケート

名前

国籍

Ｑ１ 今日の授業の内容について、面白かったところは？

Ｑ２ 今日の授業に対する感想は？

【資料2】中間レポート用紙

中間レポート

日付

名前

テーマ１　近代（明治・大正時代）日本人の衣食住の文化のなかで、あなたにとって一番深く印象に残ったものは何ですか？その文化について少し紹介してください。そして、深い印象が残った理由について簡潔に述べてください。

テーマ２　あなたの国では、近代の衣食住の文化はどのように変化してきましたか？「衣」「食」「住／暮らし」の三つのテーマから、一つを選んで詳しく述べてください。